

読書会BB カール・バルト「キリスト教会の宣教の困窮と約束」

加藤常昭先生訳 読書会

L306～LL388 パレフレーズの試み

それから、この男は、会衆に歌を歌わせます。古風な歌であります。

牧師は、会衆に歌を歌わせます。古めかしい言葉の古風な歌です。

恐るべき思想内容がいっぱい詰まっております。随分昔に眠りにつきました父祖たちの苦痛、戦い、勝利を証言する思い出、死の香りがする証言であります。

この歌の内容は、私たちにとっては非日常的であり人間の理解を超える思想が充満しています。昔むかしに死んだ祖先たちの苦しみや戦い、勝利を証言するもの、死を思い起こさせる証言です。

※「恐るべき思想内容」

確かに讃美歌の内容は、人間中心の現代世界からすれば、神々が支配する古代世界の思想内容。「恐るべき思想内容」と言えるかもしれない。

すべて、ひとつの測定不能の出来事の淵まで導いてくれます。

その歌の中に充満している恐るべき内容、父祖たちの苦しみや戦い、勝利を想い起すための証言、死の香りがする証言は、人間が測ることの深い淵のような神の出来事であるが、その淵ギリギリまで、牧師と会衆を導く。

※この「すべて」とは、このすぐ後に「牧師も教会員も、自分たちが歌ったり歌わなかったりするのが」とあるので、讃美歌についての「すべて」。讃美歌についてのすぐ前の行「随分昔に眠りにつきました父祖たちの苦痛、戦い、勝利を証言する思い出、死の香りがする証言」すべてが、「ひとつの測定不能の出来事の淵まで導いてくれます」と言っている。

※「測定不可能の出来事の淵」

人間が測定できない出来事というからには、人間が起こすことではなく、神が起こす出来事、計り知れない深淵のような神の出来事と言ってよいのではないか。計り知れない深淵なる神の出来事、その近づけるギリギリ近くまで連れて行ってくれる。「随分昔に眠りにつきました父祖たちの苦痛、戦い、勝利を証言する思い出、死の香りがする証言」である礼拝で会衆が詠う讃美歌が、「出来事の淵」

神の出来事が起こるぎりぎりまで、状況をもっていく、神の出来事が起こるような準備をする、という事であろうか。

牧師も教会員も、自分たちが歌ったり歌わなかったりするのが何であるのか、理解しているのか、どうかわかりません。

しかし神の回想に満ちております。繰り返し、神を思うのであります。「神は臨在される！」と歌います。神は臨在されるのであります。この状況全体が証言しております。叫んでおります。明らかに、神はおられる、と。

奇怪な教会機構という現実の中で、教会という建築物の中で、

「ただ一つの生涯を、全くただ、“神が生きて働いておられる”ということに結び付けてしまった者（牧師）が司式する礼拝は、神の回想に満ちている、神を思い起こす。繰り返し神を思い、「神は生きてここにおられる」と歌う。神は、この礼拝の場におられる。そう、この礼拝という状況全体が、大声で、はっきりと、誤解しようのないほど明らかに「神はおられる」と叫んでいる。

しかも、牧師が見、また教会員から見ますと、この状況が、疑わしいものであり、悩みの種になり、慰めなきものであったとしても、そのことに変わりはありません。

牧師や教会員が、神の臨在を疑問に思っており、礼拝することが、悩み多く慰められない状況であったとしても、人間の状況に左右されず「教会で行われる日曜日の礼拝に神が生きて臨在されている」ことに変わりはない。

状況が満たされております時にまさってさそうであります。つまり、人間的に申しまして、うまく成功しておりますて、状況の問題が半分くらいは完全に覆われてしまっている時よりも、しっかりと神のご臨在を、証言しているのであります。

教会の宣教（礼拝）の状況が、順調である時よりも、うまくいっていない時の方がより神の臨在が確かなものになるのです。つまり、人間的に成功しているように見えて、宣教（礼拝）の問題の半分くらいが表面化していない時よりも、教会の宣教（礼拝）が困窮しており、宣教そのものが持つあらゆる困難が表面化している時の方が、宣教（礼拝）の状況は、神のご臨在をよりしっかりと証言しています。

※「状況」とは、何を指すのか。 L252に「状況全体の中に、この期待がしっかり存在し」とあるし、又、「キリスト教会の宣教の困窮と約束」という講演のタイトルからしても、「キリスト教会の宣教の状況」つまり、「礼拝の状況」と言ってよいのではないだろうか。

三

さて、しかし、状況とは、何を意味するのでありましょうか。

教会の宣教（礼拝）で何が起きているのでありましょうか。

あの期待が指し示している出来事とは、いったい、いかなる出来事でありましょうか。

日曜日の鐘がなり、礼拝堂に集められる牧師や会衆の中にある期待、彼らが意識しようとしまいと、礼拝という現実の中に横たわる期待は、いったい如何なる出来事を期待しているのでしょうか。

期待は、しかし、その出来事の中に、自分を反映させているのであります。

礼拝に集められる、という状況の中に横たわる期待は、そこで起こる出来事と密接に関係しており、起こる出来事の中に、人々が期待しているその事が映し出されています。

この関連において、「神が臨在される」とは、何を意味するのでありましょうか。

このように礼拝に対する期待がある中で、「神が臨在される」とは、どういう意味があるのでしょうか。

私どもが、花咲く桜、ベートーフェンの第九番の交響曲、国家、あるいは、私どもの、あるいは他の人びとの尊い日常の仕事に、同じ語り方を適用することを許されるだろうとするのも、同じようなことなのではありませんか。

※「桜」は自然、「ベートーベン第九番交響曲」は芸術、「国家」、「尊い日常の仕事」はそのまま。これらのリストは、L337 から、「わたし達が生きることを意味を見出すことのできそうなもの」と言えるのではないか。

※「同じ語り方を適用すること」とは、“そこにおいても「神が臨在されている」という期待を持ち込むことができる、と語れるのではないか”ということだろうか。これらの事物についても、礼拝と同じように語れるのではないか…ということか。

私たちが、教会の宣教（礼拝）以外の事柄、自然、芸術、国家、日常の働きなど、生きることを意味を見出すことができそうなものの中に「神の臨在」を問うこともできるのではないのでしょうか」

そうでなければ、これらは余計なことをしていることになるのではないのでしょうか。

※「これら」は複数形なので、「桜」「第九」「国家」「日常の仕事」のことか？

『神の臨在』を問い、それを経験する、という奇蹟がないのなら、自然や芸術や国家や日常の仕事は、無意味なことになるのではないか。

まさしくこの状況に備わる特殊なるものが、ある特別な、ひとつのこと、特殊であり、より大胆な思いで語られる「神は臨在される！」ということ、なぜ目標にしていない、ということがあるであらうでしょうか。

いやそうではなくて、「この状況」教会の宣教（礼拝）に備わる特殊で特別な一つものがある。それは、桜や交響曲や国家や日常の仕事など、礼拝以外の事柄を通してよりもより大胆に「神は臨在される！」と語ることを、目標としていない、何てことはあり得ない。

こうなのではないでしょうか。この状況の中へ、人間が身を置こうとしますならば、つまり教会堂に入ろうとしますならば、そこで人びとは、知ろうと知らなかりと、桜、交響曲、国歌、日常作業、その他もろもろのものを、何らかの仕方ですべて消費し尽くした可能性として、背後に置いてきているのであります。

日曜日の朝、礼拝するという状況の中へ、人間が身を置こうとするのなら、意識しようとしまいと、自然や芸術、国家や日常生活等という、礼拝以外の全てのものを、そこに神の臨在の可能性を見出せないものとして除外して、礼拝にのみ神の臨在を経験する可能性を期待するのです。

答えは、こうであります。神は臨在される。このことは、これらのすべての可能性のなかに、疑いもなく、与えられていることでもあります。これらの事物の真理内容であります。

答えはこうです。神は臨在される、確かに、自然、芸術、国家、日常作業を通じて、神の臨在を見出す可能性は確かにあります。これらの事物の真理です。

だが、生きることを語るその証言は、またもや疑わしいものとなりました。

しかし、私たちがそれらの中から真に「神は臨在される」と事を見出して行う証言は、疑わしいものとなります。明確な証言ではなくなります。

現存在の大きな謎であります。私どもを取り囲む自然の、理由がわからない無言であります。

それらの中に神の臨在を見出す証言が疑わしいのは、現存在の謎です。私たちが取り囲む「あるがまま」の状況は、私たちに、何故それらから、神の臨在の確か

な証言を得ることができないのか、という事については何も語ってくれません。

個々の、時間の中に存在するすべてのものの偶然性であり、闇であります。諸民族と個々人の苦悩であり、運命であります。根元悪、死です。

時間の中に存在するものは、その連関を明確に理解できない偶然性をもっている、とも言えます。よく分からない、闇があります。ありのままの状態（自然の状態）では、「神は臨在される」という明確な確信が得られないために、諸民族と個々人の苦悩がありますし、それは、人間の運命とも言えるでしょう。ありのままでは、神の臨在を確信できないことは、根源悪であり、「死」そのものなのです。

これらは何度もやってきます。

偶然性、闇、諸民族と個々人の苦悩、運命などを、私たちは何度も経験します。

そして語ります。私どもに、神が臨在されることを確かなこととしてくれる全ての声よりも大きな声で語ります。

そして、私たちに語ります。「神は臨在されるのは、確かなことだ」と語ってくれる声よりも、大きな声で語ります。（「神はいないかもしれないぞ」と。）

問いはもはや抑えつけることはできません。ますます燃えるように熱くなってきておおります。いったい、それは本当のことなのでしょうか。

そのような大きな声に取り囲まれているから、私達の疑惑はもはや抑えつけることはできません。「いったい、それ（神は臨在される）とは本当のことなのでしょうか」と問わずにはいられないのです。

散らされている者たちがひとつにされるとの予感^{予感}は真実なのでありましょうか。

礼拝でもたらされる「散らされている民が一つになる」との予感^{予感}は真実ですしょうか。

諸現象の流れの中に、静かに存在する極があるとの予感^{予感}は真実なのでありましょうか。

様々に変わっていく諸現象の奥に、永遠に変わらぬ「極」がある、という予感^{予感}は真実でしょうか。

もろもろの星の背後のどこかに義があるとの予感^{予感}は真実なのでありましょうか。

もろもろの天体の存在の背後には、義、それらを造り存在せしめている「義」があるのではないか？という予感^{予感}は真実でしょうか。

※「極」とか「義」には、哲学の背景があるのでしょうか。

そうではなくて、今や、一挙にして私どものいのちとなっている、あの出来事^{出来事}のなかで、地上を覆う天を予感するもの^{もの}のところにやって来るのであります。

いえ、そうではありません。今や既に、一挙に、私^私たちを真実に生かすものとなっている「あの出来事」(キリスト・イエスの出来事)の中に、古い地上世界を覆う神の支配を予感する者の所に、「神は臨在されるのは真実ですか」という問いがやって来るのです。

日曜日の朝というグロテスクな状況のすべての中へ身を委ねるのであります。そして、「神は臨在されるのは真実ですか」という問いは、日曜日の朝の奇怪な状況、礼拝で行われる全ての中に入り込み、答えられるのを待つのです。

この状況こそ、先ほど語った可能性の潜在的な表現であります。

このような礼拝こそ、「神は臨在されるのか」という問いに答えることができるという可能性を、密かに有しているのです。

よくお分かりになったでありませんか。

人びとが聴き、認識し、知りたいと思っているのは、単なる主張、見解披露というような言葉だけを聴きたいのではありません。しかも、その人びとがまさに内的であり、靈感を受けていればなおさらであります。人びとが聴き、認識し、知りたいと思っているのは、それは本当ですかということなのであります。つまり、ほかのいかなることでもないのであります。それは、ちょうど猫が、この熱いお粥のまわりでうろうろしているようなものであります。

よくお分かりになったでしょうか。

人びとが聴き、認識し、知りたいと期待しているのは、牧師の何某かの主張や見解を語る言葉だけのものではないのです。(日曜日の朝集まってくる)人々が内的であり、靈感を受けていれば猶更です。人々が聴き、認識し、知りたいと思っているのは、「それは本当ですか」ということであり、他の如何なるものでもない

いのです。ちょうど会衆は熱いおかゆの周りをうろうろする猫のようです。「神は臨在している」ということを確かに確信したいのに、あまりにもその問いに向かうとやけどしそうで、直接確かめることができず、さりとて、立ち去ることもできず、どうしてよいか分からずにいるのです。

このような人間の欲求が聞かれるのは稀であるとか、それほどの切実な願いに出会うのはほとんどないなどということで、私どもが間違いを犯さないようにいたしましょう。このようなことを人間が単純に叫び出すことは、もちろん、ないことなのであります。私ども牧師たちの耳に囁いてくれることもないのであります。しかし、人びとが沈黙しているからといって、錯覚を抱かないようにいたしましょう。

これほどに強く切実に『神は臨在するのか』という問いの答えを求めている人に遭遇することは殆どない、ということで私達は間違いを犯さないようにしましょう。「神が臨在する、というのは本当ですか」というようなことを、人間がストレートに叫び出す等ということは、勿論ありません。私たち牧師の耳に小声でささやいてくれることもありません。しかし、人々が黙っているからと言って、「それは本当ですか」という問いの答えを求めていない、というような錯覚を抱かないようにしましょう。

血と涙、最も深い絶望と最高の希望、あのこと、いいえ、あの方を捉えたいという情熱的な願いであります。世界の創造者であり、救済者であられるが故に、世界を克服される方であります。初めであり、終わりであり、世界の主であられる方を捉えたいのであります。自分にみ言葉を語り聞かせてほしい、という情熱的な願いであります。審きにおいて恵みを約束してくださるみ言葉であります。死、におけるいのち、此岸における彼岸、すなわち神の言葉であります。

人びとは抱いているのです。血と涙をもって、最も深い絶望と最高の希望、あの出来事、いえ、あの方を捉えたい、という情熱的な願いを抱いているのです。世界の創造者であり、救済者であるが故に、世界を克服し新しくされる方です。初めであり、終わりであり、世界の主であるお方を捉えたいのです。それは、自分にみ言葉を語り聞かせてほしい、という情熱的な願いです。どんなみ言葉でしょうか。審きにおいて恵みを約束してくださるみ言葉、死においていのちをもたらす言葉、此岸における彼岸の言葉、つまり、神の言葉です。

つまり、これが、私どもの教会に通ってきてくれる方たちの背後にあるものであります。

つまり、これが（「わたしに神の言葉を語って欲しい」という情熱的な願い）が、私たちの教会に通ってきてくださる方たちの背後にあるものです。

人びとが望んでおりますものは、いわゆる現実におきましては、まだ眠っているかもしれません。

この情熱的な願いは、まだ表面的に現れてきておらず本人も気づいていないかもしれません。

まだ市民的で、まだごく通常のこととして現れているかもしれません。

また、ストレートな願いではなく、一見、神の言葉とは関係なさそうな、市民的なこと、ごく通常のこと、つまりこの世的なこととして、この願望が現れてきているかもしれません。

現実にお勧めできないのは、人間の前終末的な、あるいは前前終末的な欲求を頼りにしてしまうことであります。

しかし、だからと言って、これらの人びとの潜在的な願いに対して、私たち牧師が、終末的でないこの世的な現実的な言葉を聴きたがるという人間の欲望をあてにして答えることは、現実的にお勧めできません。

私どもがそれをしたからと言って人びとは感謝などしないであまりしょう。

私たち牧師がそれをしたからと言って、人々は感謝などしないでしょう。

人びとが望んでおりますのは、自分たちが自分を理解する以上に、私どもが人びとをよく理解してあげているということであります。自分たちが自分たちを真剣に受け止める以上に、私どもが人びとを真剣に受け止めてあげるということであります。

人びとが望んでいるのは、自分達が自分を理解する以上に、私たち牧師が人々をよく理解してあげることです。自分達が自分達を真剣に受け止める以上に、私たち牧師が人々を真剣に受け止めてあげることであります。

人びとが傷ついて私どもを訪れる時、その傷に手を突っ込んでしまうからと言って、私どもに愛がないということにはなりません。

人びとが傷ついて私達牧師のもとを訪れる時、その傷に手を突っ込むようにして（どのような傷なのか知ろうとするからと言って??それとも、痛みを伴うようなことをするからと言って）、私たちに愛がない、ということにはなりません。

そうではなくて、人びとが私どものところに来たのはなぜかを私どもが知らないかのごとく、人びとを軽くあしらったりすれば、愛がないということになるのです。

そうではなくて、人々がわたし達のところに来たのはなぜか、神が本当におられるのか知りたくて来たことを、私たちが知らないかのごとく、人々を軽く表面的にあしらったりするのなら、それこそ、愛がない、ということになるのです。

人びとが私どものところに来るのは、終局的な、最も困難な問いに衝き動かされてのことだと想定したからと言って、私どもが幻想を抱いていることにはなりません。

人びとが、私たちのところに来るのは、終末的な、最も答えるのに難しい問いかけに突き動かされて来たのだ、との私達の想定は、幻想ではありません。

そうではなくて、人びとが私どものところにやって来ましても、前終末的な答えを与えて、食べ飽きさせてしまうようなことをすれば、幻想を抱いていたことになるのであります。

そうではなく、人々がわたし達のところへやって来ても、彼らが通常聞くことのできるような終末とは関係ない、この世的なおざりな答えを与えて、「それは聞き飽きた」と言うようなことをすれば、私たちは彼らの願望に対して幻想を抱いていることになるのです。

おお、そうです。

人びとは、もちろん、暫定的にそれをするのであります。

勿論、人々は、暫定的な答えを求めて、私たちの所に来るのです。

自分たちが、本来、求めておりますものを見つけておりません。

自分達が本来求めているものを、まだ自覚してはいません。

でも、心を動かされ、喜ばされ、満足させられるということはあるのであります。

しかし、それでも、心が動かされ、喜びが与えられ、満足させられるということはあるでしょう。

基本的には、ほかのところでも見つけられたものではありませんが、（おそらく、宗教的、キリスト教的、保守キリスト教的など、さまざま形式において）見出し得たかもしれないのであります。

それは、基本的には、本来の場所ではなく、他のところで見つけられたものでしょう。人間が行っている「宗教的」な様々な形式の儀式としての営みの中で見出し得たものかもしれません。

いずれにいたしましても。カトリシズムは、この点でうまくやっている強力な例であります。人びとをつなぎ止め、子守唄を歌って聞かせ、ひとつの、さいわいにも選ばれまし390 た、究極の暫定的なものを提供して、人びとが本来求めているものを忘れさせるのに成功しているのです。しかし、錯覚を抱かないでいただきたいと思います。私どもは．．．カトリックではありません。もろもろの教会共同体もそうではありません。私どもがおります状況は、もう少し進んだ段階の状況であります。この段階におきまして、最もよく選ばれた麻薬を提供し、どんな後退現象があろうとも、ほんの部分的であり、ほんの短期間で395 ありましても成果を挙げることができているのであります。だが、善意の人が、私どもが自分の仕事をうまくやっているではないか、と保証してくれても、信用しない．．．ようにしましょう。私どもの技巧の全てが、状況の意味を回避することに成功したと言われても同じことであります。状況を深刻なものにしないでくれと、悩みつつ警告してくれる人の声にも耳を傾けないようにしましょう。私どもが、通常は的に当たる射撃などしないのに、こ400 れらは必ず当たるようになさいなどという声にも耳を傾けないようにするのです！

これらの声が語り出しているのは、神の教会の声ではありません．．．．．！私どもの場合．．．．．、状況が真剣に意味するところは、人間が、み言葉．．．を聴くことを欲するということであります。13

それは即ち、それは本当ですか．．．．．、という問いへの答えに、知っ
てか知らずか、人びとは動かされているのである、ということであります。日曜
日朝の、この状況は、終局の歴史．．．． で405 あります。終末論的でありま
す。聖書の視点においてということはしばらく全く無視し、人間の視点からだけ
見ましても、そうなのであります。ということは、この状況が入り込んできます
と、そこでは歴史、その出来事以外の歴史が終わる、ということであります。そ
して、終局の．．． 出来事を求める人間の究極の願いが尺度になるということ
であります。私どもが、この究極の願いを理解していないとなりますと、その現実
存在が窮迫の状況にあ410 るのに、その人間を私どもが真剣に取り上げていない
ということになるのであります。この窮迫状態こそ、人びとを私どものところに
導いたものであります。（繰り返して申しますが、人びとが自分を真剣に取り上
げるのにまさって、真剣に取り上げてあげる、のであります！）そうすると、私
どもが不思議がることは許されないのでありますが、大勢の人びとが、敢えて教
会の敵とまではなりません、徐々に学び始めておりますのが、教会を袖415 に
し、私どもを、善意の人びと、不安を抱く人びととだけと一緒にして、取り残し
て去って行くということであります。

そこで、何度も繰り返されることではありますが、目覚めさせられた牧師の息子や
神学者の息子たちまでもが、この静かな避難民の群れに積極的に参加しておりま
すことは、いわば、ただ心理学的に条件づけられてのことではないでしょうか。
あるいは、この子息たち420 は、近くにいますものですから、本来求められている
もものが何であるかを知ることからも、こういうことが生じているのかも
しれませんね。人びとは、私どものところで、それを見出すことが困難になっ
ているのであります。こんな言い方をしても、少なくとも、私の言い分に正しいと
ころもあるのではないでありましょうか。人びとは、私どもに幻滅．． を覚えて
いる．．．．． のであります。しかも教養のあるひとと教養のないひとと同じ
であります。425 その最も深いところにおいて幻滅しているのであります。この
人たちは、あまりにもしばしば、おそらく既に何世紀にもわたって間違っ

た．．． 食べ物で食べ飽きさせられたの．．．．． ではない
でありましょうか。人びとを歓迎してあげようという、まさに善意のこもった
意図によって、その人たちの脇を通り過ぎるような語り掛けばかりされてきたの
ではないでありましょうか。思い込んでいるだけの人間愛から、何度も新しく間
違った食べ物で食べ飽きさせ430 ようなどと考えないで、一度よく考えるべきで
はないでしょうか。人びとは、教会の中で、全く単純になかなか穏やかにならな
い不安のなかにある自分たちが真剣に受け止められ．．．．． 、理解さ
れる．．．．． ことを期待しているのではないかと。人びとは、通常（メソジ
ストや共産主義者の集会、人智学の集会で）体験している以上に、ここ教会にお

いてこそ、より真剣に受け止められ、理解されることを待っているのです。435

十分に驚くべきことですが、人びとは、私どもから、少なくとも、洗礼を受け、堅信礼を受け、結婚の司式をしてもらい、更に葬りをしてもらい、そのことによって、自分たちが私どもに寄せている期待がまだ完全には消えてはいないことを示してくれているのであります。同じように十分に驚くべきことは、依然として各個教会があり、また地域共同体としての教会がちゃんとあるということです。440

ところで、これらのものが、もしなかったとすれば、もっとよかったのかもしれませんが。14

そうすれば、結局のところ、鐘が鳴った時に、それが何を意味したかに気づいたであろうと思います。

しかし、私どもは、神の寛容によって、悔い改めを差し控えるようなことをさせられてはいないのであります。この神の寛容は、民衆が眠りこけているということだけにおいて 445 も、私どもに示されているのであります。そして、この悔い改めこそ、今日の人間を考えてみますと、今の時代の第一の戒めであり得ると思われれます。